

本学会を設立したときのわれわれの目標は、大体次の四つにまとめられる。

- (1) 世界に向けて新しい学問と思想とを訴える会としたい。
- (2) 未来の理想となる人間像を探求する。巻頭の「新しい世紀への提言」にのべてあるように、現代の世界には精神の荒廃にともなってモラルなき時代が到来したような感じさえ受ける。こういう思想的心理的状态に対して、われわれはいかに考え、いかに行動すべきか。
- (3) それには、哲学、宗教から心理学や医学から

理工系に至る諸分野の研究者を組織して、「人間性」 Human Nature という分野について研究交流をさかんにしなければならない。

- (4) こういう学際的研究において大事なのは、心身にかかわる体育・芸術や臨床医学の分野である。生きた身体をあつかう学問は、文科系と理科系を結ぶ「要」(かなめ)の位置を占めているからである。

今この文章を書いているのは99年暮れであるが、次の時代に向かって本会が第一歩を踏み出した、という手ごたえを感じている。ありがとう、みなさん。

韓国人体科学学会に出席して

長岡短期大学教授 定 方 昭 夫

1. 韓国の人々との交流

去る99年5月14日、韓国は太田(テジョン)で開催された韓国人体科学学会・春季学術大会に出席したので、その状況をお知らせしたい。これは、99年3月に来日した韓国人体科学学会の諸氏から、この大会にしかるべき人を派遣してほしいと要望されていたため、湯浅副会長が講演することがきまったもので、筆者はかねがね韓国の状況に関心があったので、これ幸いと同行した次第である。

ソウル空港では、3月に知り合った崔先生が日本語通訳とともに出迎えて下さった。先生は日本語が流暢で、中央大学で開かれた第9回人体科学会「韓国における丹学の現状」について講演されたあの崔先生、と言えば、思い出される会員もおられると思う。崔先生は現在亜州大学教授で、韓国人体科学学会副会長の職にある。若いころ東京工業大学に留学し、工学の博士号をとられていると聞けば、日本語がうまいのも当然である。先生みずからの運転で高速道路を一路南下、3時間あまりで太田市内に入る。

会議は明日からなので、まず状況視察ということで、市内にある鄭先生のクリニックを見学する。中央にソファなどをおいた広いフロアの周囲に、気功練習室、治療室、薬局などの部屋が配置されている。湯浅・定方両名とも韓国式マッサージを体験する。韓国では、いわゆる東洋医学は「韓医学」と称していて、制度上、近代医学とまったく同じ取り扱いを

受けている。鄭氏は「韓医師」を名乗っており、韓医科大学もあるという。日本の現状にくらべて何とも羨ましい。鄭氏は、現在崔氏とともに韓国人体科学学会の副会長の一人である。1階の料理店で焼肉をご馳走になり、大会が開かれる大学のゲストハウスに泊まる。

さて翌日。会場になっている韓国科学技術大学は、数年前ソウルから移転したそうで、広い学園都市の中にあった。出会った学生に尋ね尋ねして、会場にあてられた韓国科学技術院・医科学研究センターにたどり着く。

2. 研究発表の内容

大会は1日だけで、昼食をはさみ、AM10時からPM6時まで8つの発表が行われた。演題と発表者名を記しておく(苗字のみでお許しいただきます)。

1. 日本における気の科学的研究の現在
湯浅(人体科学会)
2. 国内外における生命情報科学研究の現状
朴(延世大学電子工学科長)
3. 韓国気功の原理体験
金(韓国気功アカデミー院長)
4. 針灸と脳
チウ 丕(カリフォルニア大学)
5. 脳波と心
金(韓国科学技術院)
6. 頭脳の記憶メカニズム
チン 亨(亜州大学)
7. 脳呼吸指数の開発に関する研究
ギョ 亨(高麗大学)
8. Lロッドを通じて見た世界
張(仁荷大学)

(以上の発表と氏名は崔氏の訳による。プログラムはすべてハングルなので読めない。漢字に直せない場合もあるので、そのまま記したものもあります。)

発表を聞いた感想

2. の朴教授(韓国精神科学学会会長)の発表は、日本の研究と出版物についての情報に精通した内容であった。初めて聞いた定方は驚いたが、湯浅は以前からの知り合いなので驚かず。朴先生は東大で医用機器工学を勉強し、何度も日本に来日していて、国際生命情報学会(ISLIS)にもよく出席されているから、詳しいのは当然なのである。

8. のLロッドというのはL字形に曲げた金属の棒を用いて「風水」を研究しようとする内容で日本ではあまり見かけない。この学会は97年秋に第1回の大会を開いたそうで、その時は数百名の出席者があったという。今回はあまり宣伝していないので、出席者の数はそれほど多くはなかったが、熱心な聴衆が多く、質問もたくさん出た。

会議終了後、立食形式で、お茶と菓子をつまむ韓国スタイルの懇親パーティ。日本のように飲んだり食べたりはしない。朴先生は、将来いずれ日・中・

韓の人体科学研究者により合同大会を開きたいという考えのようであった。もしもそういう会議が実現すれば、21世紀に向けて意義のあることだろう。

3. ソウルの夜話

会議散会后、ふたたび崔先生の運転でソウルに戻る。翌日の帰国便は午後の予定で、だいぶん時間があり、せっかくの機会なので、誰かとお話しでもされては…という誘いがあった。昼の会議で「韓国気功の原理体験」について発表し、「型」を披露した金先生と話してみたいと申し出た。金氏は女性の弟子をともなって現れ、ソウルの夜は気功談義となった。金先生は年はまだ若いようであるが、なかなかの使い手と見受けられた。近々中国とニューヨークに行かれるという。韓国の丹学と中国の気功がどのように違うか、見聞を広め、ニューヨークでは、例の法輪功の指導者・李洪志氏にも会ってきたいということであった。アジア三国の平和な交流が発展するように願いたい、と話に花が咲いた。日本・韓国を結ぶきずなが成長してゆけば、やがて東アジアから世界へ発信する日も近づくだろう、という期待を抱かせた夜であった。

公開講演「死と生の心理学」を聞いて

桜美林大学名誉教授 湯 浅 泰 雄

99年7月3日、早稲田大学の小野講堂で「死と生の心理学」という題で、京都大学のカール・ベッカー先生と健生会クリニックの辻内琢也先生の講演が行われた。小雨の降る日で、どれだけの人が来るかと思ったが、さして大きくない講堂はほぼ満席に近いくらい。集まった聴衆は、熱心に両先生の語る言葉に聞き入っていた。

辻内先生の話は「病院死と在宅死を経験して」という題で、「医療人類学的視点への転換」というサブタイトルがついていた。先生は、医療の現場でこの2つの死の違いをいろいろと経験された様子を語られた。在宅死の患者との心の交流から、自分が「人間としての医師」であることを感じて、教科書とは違う新しい体験を得られた。医師自身が人間として学ぶ中から、「医の技と心」が感じられることに感銘を受けた。先生は聴衆に向かって質問を投げ

かけながら話を進めてゆかれたので、納得した人たちも少なくなかったと思う。

医療人類学という分野は元来、伝統社会で行われていた医療の実際を人類学者たちが調査したことから始まった研究分野である。台湾とか東南アジアでの研究調査が早くから知られていたが、こういう伝統的医療の場では、社会の文化的伝統や習俗と結びついた心理的問題が重要な役割を果たしている。そこで、このような視点と考え方を、現代の心身医学や精神医学などの現場に取り入れてゆこうとする動きが生まれてきたものである。こういう考え方は、もっと広く今日の医療全体の課題として受け止めてよいこと、と思われる。医学の世界を見ていて感じることは、基礎医学(理論)と臨床医学(治療現場)の間に大きな違いがあるということである。基礎医学の研究は観察を主とした理科系の学問という性質